

# 東京バッハ合唱団 月報

[第574号] 2010年4月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.574  
April 2010

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## ワークショップ & コンサート バッハのカンタータを日本語で歌う

5月16日、荻窪教会（日本キリスト教団）

昨年にひきつづき、荻窪教会（日本キリスト教団、小海基牧師）と「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会よりご招待をいただき、荻窪音楽祭（第21回）に参加するかたちで特別演奏会を開催させていただきます。

\*

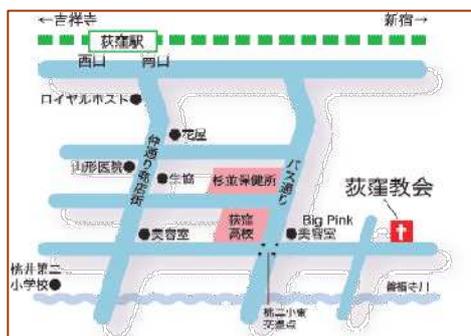
前回の公演（第19回荻窪音楽祭、2009年5月17日）は、夏にドイツ演奏旅行を控えていた時期でしたので、異なる音響空間での、しかもオルガンを備えた会場での実践経験を積ませていただく最適の機会となったものです。表の道にまで溢れんばかりの満堂のご来場者に、主催側としてはむしろひやひやした程でしたが、聴衆の皆様には大いに喜んでいただけたようです。荻窪音楽祭公式サイト「会場のお客様よりお寄せ頂きましたコメント」からいくつか抜粋させていただきます。

- ・素晴らしい企画だと思う。この企画を続けていって欲しい。今日の合唱は圧巻だった。レベルは高いと思う。よき演奏に感謝する。
- ・美しい歌声を有難うございました。
- ・荻窪音楽祭でバッハのカンタータが聴けるとはこの上ない喜びです。いつもDVD、CDで楽しむしかないものが、ここで生演奏が聴けるのは幸せです。
- ・美しい歌声、フルート、オルガンに感激しました。また聴きに来たいと思います。
- ・素敵な企画ですね。私の住んでいる町にもこんなプログラムがあればと思いました。

\*

さて今回は、3週間後に定期演奏会（6月6日）というタイミングですので、お客様には、上演曲の紹介あるいは「絵解き」となるもの、われわれ団員にとっては本

番前のリハーサルを兼ねたもの、といった位置づけで立案しました。定演の予習のつもりで、お出かけください。お申し込みはお早めに。



Workshop & Concert

### 「バッハのカンタータを日本語で歌う」

日時：2010年5月16日（日）15:00 開演（14:30 開場）

会場：日本キリスト教団 荻窪教会

<プログラム>

[第1部] ワークショップ（約50分）

“4声体コラールを体験してみよう”

（鑑賞のみのお客様も、客席で見学しながらコラールに親しみます。参加希望者には前もって楽譜コピーを郵送。）

バッハのコラールを4声部に分かれて歌ってみましょう。ここで親しんだコラールが、第2部のコンサートで登場します。「ああ、あの旋律、あの歌詞」と思った瞬間、あなたはバッハ音楽の真髄に触れたのです。「これぞ、わたしの音楽！」と、共感なさるにちがひありません。バッハと同時代の会衆が味わった共感です。母語で歌い、母語で聞く喜びがここにあります。

内容：やさしく、どなたでも歌えるコラール3曲（BWV17、BWV4、BWV52より）

- ・イントロダクション（カンタータとは？ コラールとは？ 合唱の喜び = 共同体の完成）
- ・歌詞を読む / 定旋律を覚える / 各声部をうたう / ハモってみる

[第2部] コンサート（約50分）

カンタータ第17番《感謝さげほめ歌う者に》

カンタータ第4番《キリスト死に繋がれしが》

レチタティーヴォ部分は朗読（荻窪教会員）、アリア部分は合唱団の斉唱によります。

<出演>

合唱：東京バッハ合唱団

オルガン：金澤亜希子

指揮/訳詞：大村恵美子

<入場整理券>

500円（コラール楽譜・資料代含む。定員90名）

会場（荻窪教会）の席数には限りがございますので、ご鑑賞のみのお客様も、あらかじめ入場整理券をお求めください。当日は満席の場合、ご入場をお断りすることもございますので、ご了承をお願いします。

ワークショップ参加のご希望者には、事前にコラール楽譜コピーをお送りしますので、お名前、ご希望の声部（S/A/T/B/?の内いずれか）、送付先住所、電話番号を、合唱団事務局あてお知らせください。

## 第 104 回定期演奏会 曲目案内

### カンタータ第 17 番《感謝ささげ ほめ歌う者に》 »Wer Dank opfert, der preiset mich« BWV 17

訳詞/解説：大村恵美子

1726 年、ライプツィヒのトーマス・カントルに就任 3 年めを迎えたバッハは、5 月 30 日の昇天節から、9 月 22 日の三位一体節後第 14 主日にかけて、この年に出版された詩集『ルードルシュタット詩華撰』からテキストをとって、7 曲のカンタータを作曲・初演した。これらのテキストの特色は、説教の前後を 2 部に分け、それぞれの冒頭に、旧約と新約の聖書からの引用を配して対比させ、構造の明快さとともに、楽天的な讃美をもりこんだ内容とする傾向が強い。

このカンタータは、これらのグループの最後にあたるもので、2 本のオーボエと弦楽合奏という簡素な楽器編成とも思えないような、堂々たる風格の作品である。

これら 7 曲は、くりかえし味わって飽きない佳品ぞろいなので、ここにまとめて挙げておこう。

1726 年

5 月 30 日...BWV 43《主 昇りたもう 喜ぶ声とともに》

1) 合唱(詩編 47:6,7), 4) S 叙唱(マルコ 16:19)

6 月 23 日...BWV 39《与えよパンを 飢えたる者に》1)

合唱(イザヤ 8:7,8), 4) B アリア(ヘブル 13:16)

7 月 21 日...BWV 88《見よ われ多くの漁師を遣わし》

1) B アリア(エレミヤ 16:16), 4) T/B アリオソ  
(ルカ 5:1-10b)

8 月 4 日...BWV 187《待ち望む みななれを》1) 合唱

(詩編 104:27,28), 4) B アリア(マタイ:6:31,32)

8 月 11 日...BWV 45《主は告げぬ よき行いの何なるかを》

1) 合唱(ミカ 6:8), 4) B アリオソ(マタイ 7:22,23)

8 月 25 日...BWV 102《主の目は 信仰を見たもう》1)

合唱(エレミヤ 5:3), 4) B アリオソ(ロマ 2:4,5)

9 月 22 日...BWV 17《感謝ささげ ほめ歌う者に》1)

合唱(詩編 50:23), 4) T 叙唱(ルカ 17:15,16)

初演:1726 年 9 月 22 日(三位一体節後第 14 日曜日),  
ライプツィヒ。

旧約聖書・詩編 50:23(ルター訳)「感謝を献げ、わたしを頌め讃える者は、そこに神の救いを示す道を見る」  
= 第 1 曲歌詞直訳。

新約聖書・ルカ 17:15,16「その中の一人は、自分が癒されたのを知って、大声で神を讃美しながら戻ってきた。そして、イエスの足元にひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった」= 第 4 曲歌詞・新共同訳。

1. 合唱(4 声部合唱, Ob / ・Fg・弦・通奏低音)

オーボエ 2 本と弦楽の整然たる 28 小節の導入から、7

小節にわたる感謝のフーガ主題が、1 声部ずつ T・A・S・B の順にあらわれる。間奏のあいだに、S-B, A-T と短いフーガ主題の断片がはいり、後半は B・T・A・S と 4 回、たっぷり時間をかけて主題を示すうちに、他声部は自由な展開で気分を高めて終わる、穏やかに安定した曲想で貫かれている。

後年バッハは、この曲をト長調の小ミサ曲(BWV236)の終曲 Cum Sancto Spiritu に転用した。

2. レチタティーヴォ(アルト, 通奏低音)

恵みに満たされた地上で、生きとし生けるものが、声と羽ばたきをもって感謝をあらわし、幸いはいよいよ増すことになる。

3. アリア(ソプラノ, Vn / ・通奏低音)

弦合奏の無窮動的な動きに、ソプラノ独唱は、フレーズごとに新しく創出される旋律で、ゆたかに応じる。

第 2 部

4. レチタティーヴォ(テノール, 通奏低音)

第 1 部の冒頭合唱を、旧約聖書の詩編で飾ったが、第 2 部は、新約聖書から、イエスに癒された癩病人の 10 人のうち、ただ一人サマリア人だけが帰ってきて感謝を告げた、という内容を、テノールがエヴァンゲリストとして伝える。

5. アリア(テノール, Vn / ・通奏低音)

ひきつづきテノールが、弦合奏とともにガヴォット風のリズムにのって、そのサマリア人の心意気で、感謝と讃美を明るく歌いあげる。

6. レチタティーヴォ(バス, Vn / ・通奏低音)

この世にしてすでに神の国の幸福のしるしを味わう喜び。

7. コラール(4 声部合唱, Ob / ・Fg・弦・通奏低音)

単純な 4 声部コラールが、素朴に率直にひろがり、神とわれわれとの誠実な交わりがいっそう深く示される。

2 曲のレチタティーヴォは通奏低音のみ 2 曲のアリアは弦合奏のみ。ただ冒頭合唱と最終コラールに、オーボエ 2 本が加わるだけで、じゅうぶん宇宙的広がりをもった内容に満たされている。

[歌詞] <http://www.ab.auone-net.jp/~bach/bwv017.htm>

[使用楽譜] カンタータ第 17 番「感謝ささげ ほめ歌う者に」(ブライツコプフ/東京バッハ合唱団, 2009 年刊)

#### 東京バッハ合唱団 < 団員募集 >

第 105 回定期演奏会 (2011 年 1 月)

カンタータ第 111 番 (み心は つねに成し遂げらる) BWV 111  
クリスマス・オラトリオ第 2 部 (この地に野宿して) BWV 248/II  
モテット第 6 番 (頌めよ主を 世の民こぞりて) BWV 230

第 106 回定期演奏会: 創立 50 周年記念 (2011 年 11 月)  
(口短調ミサ) BWV 232 日本語演奏 < 初演 >

土曜日 = 15:30-17:30 世田谷中央教会 (田園都市線「桜新町」)  
月曜日 = 18:30-20:30 目白聖公会 (JR「目白」)

J. S. Bach

カンタータ第 124 番 (イエス 共にあらん)  
カンタータ第 52 番 (悪しきこの世よ なれを頼まじ)  
カンタータ第 17 番 (感謝ささげ ほめ歌う者に)  
カンタータ第 4 番 (キリスト 死に繋がれしが)  
日本語演奏 (大村恵美子訳詞)

光野孝子(ソプラノ) 佐々木まり子(アルト)  
鏡 貴之(テノール) 新見準平(バス)  
草間美也子(オルガン)  
東京カンタータ室内管弦楽団(オーケストラ)  
大村恵美子(指揮)

日時 2010年6月6日(日)14:00 開演  
会場 石橋メモリアルホール  
(2010年5月 開館予定)

入場料: 前売り 3000 円 (全自由席)  
当日券あり (3500 円)

入場券発売/お問い合わせ: 事務局

カンタータ第 4 番 《キリスト 死に繋がれしが》  
»Christ lag in Todesbanden« BWV 4

初演: 1707 年または 1708 年の復活節第 1 日, ミュールハウゼン。

弦合奏のみの楽器編成。ライブツィヒで再演した際に, コルネット 1, トロンボーン 3 が加えられたが, 新バッハ全集では「任意に」とされ, 本日の演奏でも弦合奏のみとする。

全体が, ルターの復活節コラール「キリスト 死に繋がれしが」Christ lag in Todesbanden (1524) 全 7 節をそのまま用いた 全詩節コラール・カンタータ である。『讃美歌 21』にも 317 番として収録されている。

ミュールハウゼン期に, 20 歳代の青年バッハが作曲した 5 曲のカンタータは, いずれも創意に溢れて変化に富み, 合唱も多く用いられているので, 愛好者が多い (BWV106, 4, 131, 71, 196)。とくにこの第 4 番は, ルターとバッハの出自的な関連をみごとに表していること, 底知れぬ原始的な死の淵の表出に秀でていることなどで, バッハの全作品の中でも卓越したものとなっている。最初期のバッハの作品が, 全生涯をかけて到達する境地に, すでに出発点から, 身を置く資質を示していたということとは, 驚嘆すべきことである。

1. シンフォニア (弦・通奏低音)

コラール旋律の冒頭動機を用いた短い序曲。物語の発端の心象風景を鮮やかに印象づけ, 重くまた暗い。

2. 合唱 (第 1 詩節)(4 声部合唱, 弦・通奏低音)

定旋律のコラールは, 1040 年ごろの復活節のグレゴリオ聖歌に由来するもので, 教会旋法の荘重さを受けつぎながら, ルターがドイツ語のコラールにつくり直したものである。

ソプラノの定旋律に, 下 3 声部が半音階的な音程を多用しながら, 1 フレーズごと修飾してゆく。後半 われら喜び からは, バッハが早くから愛用した, あの飛び跳ねる喜びのリズム動機が支配的となり, ハレルヤ に入って間もなく, 2 分の 2 拍子の軽快なハレルヤ詠となる。狂乱的に目まぐるしく, 全声部で ハレルヤ が歌い交わされる。

第 2 - 7 曲は, コラール歌詞の各節に基づいて, 最後に ハレルヤ が現れ, それぞれの曲趣に応じて変幻する 6 通りの ハレルヤ を聴き比べるだけでも, 変奏曲の魅力を楽しむことになる。

3. 二重唱 (第 2 詩節)(ソプラノ/アルト, 通奏低音)

女声 2 部で, 線的に, ゆったりと, また途切れがちに, われらは死の国に捉えられ, 圧倒的な死の力のもとに横たえられたと訴える。通奏低音が幅広い下降音程をくり返ししながら, 黄泉の国に引きずりこむ。

4. アリア (第 3 詩節)(テノール, Vn / ・通奏低音)

弦合奏の輝かしく戦闘的なリズムに乗って, 強い戦士

たるイエスが現れる。死の影 いま消え でアダージョとなり, アレグロにもどって 死の刺 失せたり。さらに畳みかけるように勝ち誇ったハレルヤ詠に突入する。

5. 合唱 (第 4 詩節)(4 声部合唱, 通奏低音)

後半の折り返し点となるこの合唱では, 不思議な戦いが起こって 生が死にうち勝った と叙事詩風に告げる。ハレルヤ も, 死に対する優越を言いつのる風情である。

6. アリア (第 5 詩節)(バス, 弦・通奏低音)

イエスの十字架の意義が, 神秘的で謎めいた雰囲気でも重く歌われる。次第に上昇高揚しつつ, 最後の ハレルヤ では, 最高のホ音まで跳躍して終る。劇的な弦の 16 分音符のパッセージが, 急転直下の勢いで結末を告げる。

7. 二重唱 (第 6 詩節)(ソプラノ/テノール, 通奏低音)

カノン風な二重唱が, 3 連符を昇り降りしながら, 祝祭の舞曲を歌い奏でる。

8. コラール (第 7 詩節)(4 声部合唱, 弦・通奏低音)

コラールが 4 声体で端的に全容を現すことにより, イエスの死と復活が, 旧約の昔の, 出エジプト以来の神の愛の成就を, ここに全うしたのだとの結論を, 聴く者にはっきりと悟らせてくれる。

(CD 選集「日本語演奏によるバッハ・カンタータ 50 曲選」[第 1 巻]ブックレットより。一部加筆)

[歌詞] <http://www.ab.auone-net.jp/~bach/bwv004.htm>

[使用楽譜]カンタータ第 4 番「キリスト 死に繋がれしが」(ブライイトコプフ/東京バッハ合唱団, 2000 年刊)

## カンタータ中に再利用された 《ブランデンブルク協奏曲》

大村 恵美子

バッハの作品の中で、もっとも人気の集まるものの代表的と思われるのは《ブランデンブルク協奏曲》(6曲、BWV 1046-1051)であろう。一般に、声楽曲よりも器楽曲のほうにポピュラーな愛好者が多いが、その中でもこの6曲の協奏曲は、それぞれが変化にも富み、18世紀ヨーロッパの積極的なエートスを生き生きと伝えている。私も《ブランデンブルク》全曲演奏会と知れば、聞き流らすまいと心がけていた一時期があった。そしていつも満足して帰ることができた。

今回、第104回定演でとりあげたカンタータ第52番冒頭は、まさに《ブランデンブルク協奏曲・第1番》BWV1046の第1楽章そのものである。そこで私は、こんなにすばらしい音楽が、全カンタータ中にちりばめられて起用されたら、バッハも毎週の礼拝用カンタータを用意するのに、だいぶらぐだったろうし、後世の聴衆たるわれわれも、どれだけ楽しかったことだろうか、と夢想した。今までの定演でも、他の器楽曲からとり入れられた例がいくつかあったと記憶するが、それらの転用の経緯をたどると、けっこう複雑で、大論文にもなりかねない。

《ブランデンブルク協奏曲》との関係だけに限定して調べてみようという気になった。はたしてどんなことになるか。前述したように、《ブランデンブルク》の全曲ちかくが関連していたとすれば、それだけでもやはり大論文ものになるだろう。

幸いというか、あいにくというか、伝わっている全カンタータを通じて、なんと3例しかなかったのだ。そのままの原型で、カンタータの冒頭シンフォニアとして置かれたのは、このたびの定演に登場するBWV 52の1曲だけ。

あとは、教会カンタータでは、BWV174 „Ich liebe den Höchsten von ganzen Gemüte (心つくし われ主を愛す)“で、当合唱団では未発表。これは《ブランデンブルク協奏曲・第3番》BWV 1048の第1楽章を冒頭シンフォニアとしているが、原曲の弦合奏による協奏曲(リピーエーノとコンチェルトに2分する様式)を、さらに多彩化して、コルノ・ダ・カッチャ(狩用ホルン)2本、オーボエ2本、ターユ(オーボエ族の管楽器、今日ではイングリッシュ・ホルンで代用)1本を追加した豪華な編成となっている(1.シンフォニア、2.A アリア、3.Tレチタティーヴォ、4.B アリア、5.合唱コラール)。

もう1曲は、1999年の第85回定演で発表したカンタータBWV207 „Vereinigte Zwietracht der wechselnden Saiten (鳴りかわす楽の調べよ)“で、とても楽しい経験だった。なぜこのとき特別に“世俗”カンタータを演奏したのか、

とか、いろいろ話したいこともあるのだが、別の機会にゆずって、ここに組み入れられたのは《ブランデンブルク協奏曲・第1番》の第3楽章と第4楽章、また当カンタータの内容がライブツィヒ大学の法学博士コルテ氏の教授就任祝賀用だったとだけ記しておく。

つまり、1721年に完成された《ブランデンブルク協奏曲》、ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに献げられた「様々な楽器をともなう6曲のコンチェルト(Six Concerts avec plusieurs Instruments)」(原題)は、バッハ自身によって、教会カンタータ2曲、世俗カンタータ1曲の計3曲に転用されたに過ぎなかった。

因みに《ブランデンブルク協奏曲》の名称は、後に『バッハ評伝』(1873年)の著者シュピッタが、その書中で用いたことに由来する。

《ブランデンブルク協奏曲》第1番 BWV1046

・第1楽章

カンタータ第52番(BWV52/1 シンフォニア)

・第3楽章 アレグロ

カンタータ第207番(BWV207/1 合唱)

・第4楽章 トリオ第2

カンタータ第207番(BWV207/5a 器楽リトルネッロ)

《ブランデンブルク協奏曲》第3番 BWV1048

・第1楽章<改編>

カンタータ第174番(BWV174/1 シンフォニア)

《ブランデンブルク》以外の器楽曲からカンタータにとり入れられた場合も、BWV 52の冒頭シンフォニアのようにストレートに利用するより、バッハはたえず新しいTPOに合わせて、楽器編成、楽曲構成(小節数の増減等)を、細部にわたって入念にチェックし、手を加えている。客観的なデータの整理で完璧を期する現代のコンピューターよりも、瞬時に心の細かいあやに最適の表現を、頭脳中の無数の棚からえらびとり、引き出すバッハの正確さには、まったく測り知れないものがある。《ブランデンブルク》のように、類いまれな名作などにすら寄りかからず、ただ右のものを左に応用しようという安易さとは無縁な、作家バッハの底知れない存在を、仰ぎのぞむほかはない。



コルノ・ダ・カッチャ

ターユ